慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶長勅版の刊行について：慶長四年刊本を中心に
Sub Title	
Author	安野, 博之(Yasuno, Hiroyuki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2000
Jtitle	三田國文 No.32 (2000. 9) ,p.25- 33
JaLC DOI	10.14991/002.20000900-0025
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20000900-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶長勅版の刊行について

――慶長四年刊本を中心に――

安野博之

はじめに

慶長勅版とは、後陽成天皇の勅命によって刊行された古活字本の称である。慶長勅版については既に川瀬一馬氏の総括的な研究があり、[1]その印刷技法は金子和正氏、森上修氏によって明らかになりつつある。[2]ただ、慶長勅版の依拠する本文が何であるかについては、今まであまり関心が払われていないようである。筆者はかつて、慶長勅版『長恨歌琵琶行』『白氏五妃曲』の本文が、豊臣秀吉侵略時に将来したとされる朝鮮本に拠っていることを論じてみた。[3]本稿では、関ヶ原の合戦前に相当する文禄二年から慶長四年の間に刊行されたものを取り上げ、その刊行事情について若干の考察をしていきたい。

一

後陽成天皇による勅版刊行の嚆矢とされるのが、文禄二年（一五九三）刊『古文孝経』である。本書は現存せず、その刊行は『時慶卿記』の記事によって確認できる。ここに該当個所を西本願寺本により摘記してみると以下のようになる。

文禄二年（一五九三）
閏九月二一日　天晴、禁中御触、折紙アリ、雖当番則参上候、ハンノ字ヲ十一両人ニ被仰付撰候。
二二日　天晴、善右衛門出候、禁中参上、文字ヲ撰事、如昨日。
二三日　天晴、如昨禁中参上、板考ノ字ヲ撰及薄暮退、日野ハ不参也。
二四日　天晴、如昨禁中ヘ字撰ニ参候、泉長老被召、文韵ヲ被引候、及黄昏ニ退出。
二七日　天晴、飯後禁中御番参勤、吉田代又内々被召候、先度ノ残文字引候、於御湯殿ノ上ニテ、勅言ヲ奉候、広橋中納言、右衛門督、飛鳥井中将、極薗南禅寺ノ三長老等也、又某ニハ先日被仰付候書籍之目録推可申通候。
一一月六日　天晴、（中略）於御湯殿上、六條ト両人ニ板校ノ字其類〳〵撰集候。直ニ仰也。
一六日　天晴、晩ニ雨（中略）古文孝経ノ板出来候、

上ヨリ被見下候。

一二月八日　雨天（中略）自禁中孝経印本拝領、長橋迄御礼ニ参上、今度板校ヲ被起候本也。

一三日　天晴、（中略）禁中御会参上、執筆ハ六條也、申刻ニ果食ハ如例、於内々番所ニシテ在之、御会ノ席ハ小御所也、午刻モ於御前御酒アリ、各御人数ニ孝経ノ印本被下、六條ト某斗ハ先日拝領也。

これによれば、六条有広・西洞院時慶の二人がお湯殿上の間において植版に従事し、一一月一六日をもって印行を終え、一二月八日に両人がまず拝領し、一三日に他の近侍の者に下賜されたという。[4] 本書については、確たる根拠もないまま従来銅活字版と見なされてきたことに対し、森上氏は異議を唱えるが、[5] 本書が現存しない以上、不明という他ない。『古文孝経（孔安国伝）』は、中国で五代の乱により亡失しており、[6] 慶長以前の中国刊本及び朝鮮本の存在を確認することができない。『古文孝経』

慶長勅版一覧（『国史大辞典』「勅版」の項（飯田瑞穂氏執筆）をもとに一部改変した）

書名	冊数（丁数）	版式（匡郭・界・半丁字詰）	出版年時
『古文孝経』（文禄勅版）	不明	不明	文禄二年一一月一六日（『時慶卿記』）
『錦繍段』	一冊（六四丁）	左右双辺・有界・八行十七字	慶長二年七月下澣（跋文）
『勧学文』	一冊（五丁）	左右双辺・有界・八行十七字	慶長二年八月下澣（跋文）
『日本書紀神代巻』	一冊（四四丁）	四周単辺・無界・八行十七字	慶長四年閏三月三日（『お湯殿の上の日記』）
『大学』	一冊（九丁）	左右双辺・有界・八行十七字	慶長四年閏三月八日（同右）
『中庸』	一冊（一八丁）	左右双辺・有界・八行十七字	慶長四年閏三月一七日（同右）
『古文孝経』	一冊（九丁）	左右双辺・有界・八行十七字	慶長四年五月二五日（同右）
『論語』	一冊（三五丁）	左右双辺・有界・八行十七字	慶長四年五月二五日（同右）
『孟子』	二冊（一四〇丁）	左右双辺・有界・八行十七字	慶長四年五月二五日（同右）
『職原抄』	二冊（九九丁）	四周単辺・無界・八行十七字	慶長四年六月（篆書木記）
『長恨歌琵琶行』	一冊（一三丁）	四周双辺・有界・八行十七字	慶長八年正月（『慶長日件録』）
『白氏五妃曲』	一冊（一四丁）	四周双辺・有界・八行十七字	慶長八年四月一日（『言経卿記』）
『陰虚本病』	一冊（六丁）	四周単辺・無界・八行十七字	不明（存疑・小汀利得氏蔵古活字版による）
『中臣祓』	不明	不明	不明（存疑・慶安刊『中臣祓』による）

は本文の異同が頗る多く、それぞれがみな異なる本文を持っていると言える程である。それは『古文孝経』が写本でしか伝来しなかったことに起因し、、慶長勅版『古文孝経』においても、その本文は日本の古鈔本に依拠したものと思われる。

文禄二年に続き、慶長四年に再び刊行された勅版『古文孝経』は、管見の限り天理図書館本、東洋文庫本、国会図書館本、宮内庁書陵部本、愛知県立刈谷図書館本の五本が確認でき、既に覆製本が二度刊行されている。[7] 本書は孔伝本の単経本で、喪親章は省かれている。これは当時の喪親章不読の慣行に倣ったものであるとされる。[8] 本書の書誌については既に言及があり、[9] 筆者はこれに付け加えるべき点を持たない。本書の活字についても文禄二年刊本同様、銅活字版とみる説もあったが、[10] 金子和正氏は、印刷面の文字に濃淡がみられることから、本書を木活字印刷であると訂正した。[11] また、本書は確たる根拠の無いまま清原国賢（秀賢の父）により、清原家の家本に拠って刊行されたものといわれている。[12] しかし、本書の本文を清原秀賢の跋文を有する慶長七年刊本や、清原尚賢校享保六年（一七二一）本と比較するに、明らかにそれとは異なる本文である。慶長七年刊本は京都大学附属図書館、東北大学附属図書館、東洋文庫、高野山宝亀院に蔵するが、そのうち京大、東北大蔵本はともに二六丁目（尾題、跋文があり、この部分のみ整版）を欠き、東洋文庫本は跋文に虫損がある。ここで慶長七年刊本の秀賢による跋文を高野山宝亀院本により掲出してみる。[13]

或一日来而謂予曰、孝経者非百行之為本書乎、今世好事者多以雖費梓、工未及此書惜矣、因貰刊鋟之労、欲備幼学之几案也、予感其志、遂出累代的本、借與焉、予亦時々加校訂者也

慶長壬寅八月壬子明経儒清原秀賢誌

出版人とおぼしき「或ルヒト」の言葉に「今ノ世ノ事ヲ好ム者ハ多ク以テ梓ニ費ヤスト雖モ、工未ダ此書ニ及バザルハ惜シイカナ」とあるが、秀賢が慶長勅版『古文孝経』の刊行を知らなかったとは考えられず、これは民間での刊行がなされていなかったという意味であろう。この跋文は秀賢の自筆に酷似し、東北大学本は東洋文庫本の跋文を虫損箇所に至るまで摹鈔してある。[14] 恐らくこの跋文は刊行当初からあったものではなく、民間において最も早く注を持つ『古文孝経』を刊行したことの証左として、後から加えられたものであろう。丁付けは二四丁までであり、跋文の二六丁のみならず、本文最終章（喪親章）を載せる二五丁目にも版心に丁付けが付されないのは、当初喪親章を印行しない予定であったためとも考えられる。その真偽はともかく、この跋文からは慶長四年の時点で、秀賢が勅版『古文孝経』の刊行に関与していたとは考え難い。『言経卿記』慶長三年二月二一日条では言経が意庵を尋ね、内々に依頼していた一字版の『大学』『中庸』『孟子』の新刊本について、それを受け取るために同行の阿茶丸に使いの用をさせ、四月二二日にこれらを入手している。そして『論語』については同年九月一一日に、清原秀賢を介して受領していることが既に指摘されている。[15] 秀賢がどこまでこの慶長勅版に先立つ古活字版の刊行に関わったのかは不明であるが、「工未ダ此書（『古文孝経』）ニ及バザル」状況であったと思われる。翌年刊行された慶長勅版が

清原家の本文ではなかったこともあり、秀賢は慶長七年に至り『古文孝経』の刊行に協力したのであろう。静嘉堂文庫にはこの慶長七年本と同種活字の『論語』（一〇一―二〇（八一八三））があり、巻十尾題の後に「此圓珠者以大学博士清原秀賢本／写点轍莫許他之一瞬可秘／慶長龍集第八夏五吉辰瀧川豊前守」の墨書識語を有し、秀賢の伝える家本によって加点した由が述べられる。[16] 本書の本文もまた慶長勅版『論語』と一致しない。慶長七年版『古文孝経』と同種活字であることからも、この『論語』についても秀賢が関与している可能性が高い。

先述の享保六年本『古文孝経』は関西大学図書館、東北大学図書館、椙山女学園大学図書館に蔵し、慶長頃の刊行と推定される無刊記第二種本の覆刻であることが指摘されている。[17] 先の秀賢の跋文からすれば、仮にこの無刊記古活字版が清原家の本文だとしても、慶長七年本よりも後のものであろう。[18]

清原家が御読書始に使用した本は、現在京都大学附属図書館清家文庫に蔵する清原教隆奥書本であるが、これと慶長七年秀賢本や享保六年本の本文とが一致しないのは、御読書始に使用する本文を門外不出としたためであろう。[19] 総じて、慶長勅版『古文孝経』の本文は、清原家が関与したものではなかったと思われるのである。

二

そこで注目したいのは、京都大学附属図書館平松文庫蔵西洞院時慶鈔写『古文孝経』（平松―第八門―コ―6）である。本書は早く『孝経善本集影』（大阪府立図書館編、昭12・6）に収載されているが、阿部隆一氏の「孔伝古文孝経校勘記」[20] にも触れられず、ほとんど注目されることがなかったものである。簡単に書誌的事項について触れてみることにしよう。

大本袋綴一冊。写本（江戸初）。薄茶色表紙（26.3×20.1）左肩に打付け書きで「孝経」と墨書。遊紙なし。本文墨付七丁、十二行二十字。本文とは別筆で以下の識語がある。

吾先君西洞院時慶卿所自写古文孝経一冊、凡吾家幼子童孫入学之時、先教以孝経用、此和訓蓋故事也、予入学之時、受祖時量之口授亦此和訓也、世々可寶而秘之　　時春識

本書と慶長四年刊『古文孝経』の本文を比較するに、ごく僅かな相違点を除けば、字体に至るまでほぼ一致する。本書の本文が時慶の筆であることは『時慶卿記』『夢後記』等と比較して明らかである。[21] ただし時慶鈔写本は聖治章において、目移りによる誤写がみられるなど、良質な伝本であるとは言い難い。恐らく慶長勅版そのものか、慶長勅版の基となった本文を時慶が鈔写したものの一本ではないだろうか。時慶は歌人としてその名を知られているが、『論語』『荘子』『蒙求』等の講釈に出席するなど、漢籍にも少なからぬ関心を持っていた。[22] 慶長四年刊『古文孝経』が清家本に一致せず、時慶鈔写本にほぼ一致するのは、彼が文禄二年刊本に続き、慶長四年刊本に至ってもその刊行に関与していたことをうかがわせる。ここで慶長四年刊本の刊行に関する記事を『お湯殿の上の日記』より掲出してみよう。

慶長四年（一五九九）
閏三月八日　大かく（大学）新はんに仰せつけられ候、けふいてき候。

一七日　中ようも（中庸）新はんいてきたつる。
五月二五日　四しょ（四書）、きょうきゃう（孝経）新はんに仰つけられていてき、御所御所、おとこたちにたふ。

木村三四吾・金子和正氏はこれらの匡郭、界線、柱刻の磨損状態より、これらの慶長勅版が『大学』・『中庸』・『古文孝経』・『論語』の順に刊行されていることを指摘し、『お湯殿の上の日記』の記述を裏付けた。[23] 慶長四年刊『古文孝経』は、四書の刊行に伴い、文禄二年刊本の本文をもとに時慶等によって刊行されたのではないだろうか。本書に先行する慶長勅版として慶長二年（一五九七）刊『勧学文』があるが、東洋文庫蔵本の巻首扉には、時慶の筆で「上ヨリ　時直ニ拝領　慶長二年八月二六日」とある。時直は時慶の子であるが、このことからも時慶が後陽成天皇の側近として、慶長勅版の刊行に深く関わっていた人物であることが察せられよう。

慶長勅版『古文孝経』及び四書が、割注を持たない単経本で刊行されたことは、刊行を急いだために技術的に難しく、煩雑な割注を省いて単経本として刊行したか、初めから単経本を採用したかのいずれかであろう。四書のうち『大学』『中庸』は清家本に拠っていると考える向きもあるが、[24] 本文が校訂を経ている可能性もあり、単経文本文の特定は困難である。仮にそれが清家本に拠っているとしても、清原家の積極的な関与はなかったのであろう。その一方で、ほぼ時を同じくして刊行された慶長勅版『日本書紀神代巻』『職原抄』については、明らかに清原家が関与していることがわかるのである。以下両書について検討していきたい。

三

慶長四年（一五九九）閏三月に後陽成天皇の勅命により刊行された『日本書紀神代巻』は、現在宮内庁書陵部に三本存するのを始め、神宮文庫、京都大学附属図書館、陽明文庫、大阪府立図書館、静嘉堂文庫、成簣堂文庫などに、慶長勅版のうち最も多い一五本が現存する。[25] そのうち成簣堂文庫蔵本は昭和三年に一誠堂より覆製が刊行されている。ここで煩を厭わずその跋文を掲出する。

日本書紀歴代之古史也。元正天皇養老年中、一品舎人親王太朝臣安麻呂奉勅撰之。吾朝撰書迄奏覧以是為権輿者耶。君臣共以莫不窮此書矣。按応神天皇以還至継体天皇御宇、異域典経多以雖来朝、不解其義、徒経三百有余歳矣。推古天皇御宇、聖徳太子察三才之源、達三国之起。故始以漢字附神代之文字傍。於于爰吾邦人浸得識量典経之旨。非至聖敢成此綜哉。蓋神道者為万法之根抵、儒教者為枝葉、仏教者為花実。彼之二教者、皆是神道之末葉也。雅以枝葉顕其本源。然則異曲同工者歟。頃学儒仏者夥、而知神書者鮮矣。物有本末、事有終始。何棄本取末焉。於神国争疏神書乎。万機之政尚以神事為最第一。但神代事理既幽微、非理不通。欽惟陛下寛恵叡智之餘、後世惜其流布之不広、遂命鳩工、於是始壽諸梓矣。旧本頗純駮不一、求数本考正之、去其駮而録其純。用之国而及之天下、則以成熙皞之治、以紹神尊之統、保瑞穂之地、千五百秋将必有頼於斯焉。

慶長己亥姑洗吉辰

正四位下行小納言兼侍従清原朝臣国賢敬識

この国賢の跋文によれば、本書は諸本の校訂を経た本文であるという。現存する慶長勅版のうち、割注の存するものとして注目される。版式は四周単辺・無界であり、それ以前の慶長勅版が左右双辺・有界であったのと異なる。清原家の家学を大成した人物として知られる宣賢が吉田家から清原家へ養子に入って以来、清原家と吉田家との関係は密接であった。清原国賢が本書の刊行に関与したのはそのためである。

次いで同年六月には勅版『職原抄』が刊行される。[26] 本書は大東急記念文庫、安田文庫、宮内庁書陵部にそれぞれ現存する。本書には見返しに篆書で「職原鈔慶長乙亥季夏刊」とあるのみで、跋文はないが、その本文は宣賢自筆本を直接書写した尊経閣文庫中原康雄本や、大東急記念文庫蔵清原枝賢本及び京都大学清家文庫蔵清原国賢本に一致する。本書の刊行も『日本書紀神代巻』同様、清原国賢に命じられたものであろう。慶長一三年（一六〇八）四月に至り、秀賢もこれらの本文に増補を加えた古活字版を刊行している。[27] 版式も『日本書紀神代巻』と同じく四周単辺・無界である。

以上みてきたように、慶長四年の僅か四ヶ月の間に、七種もの勅版が刊行されているのであるが、これらは本文選定及び校訂に西洞院時慶等が関与したものと、清原家が関与したものとに分類することができるのではないだろうか。前者は固定匡郭の植字版が使用され、後者は毎版の組み替えによる組立方式である。[28] 内容面においても、前者が単経本の漢籍であるのに対し、後者は割注を有する国書である。後陽成天皇はこれらを同時期に、それぞれ個別に刊行させたようである。そのうち天皇が重視したのは間違いなく国書の方であり、とりわけ『日本書紀神代巻』であったことは、前掲の跋文に明らかである。

四

後陽成天皇は文禄から慶長初年にかけて、皇室・公家が伝統的文化を保持し、その存在意義を世に明らかにしようと努力し、慶長勅版の刊行もその一つとして位置づけられることは、早く井上宗雄氏の指摘するところである。[29] それでは何故慶長勅版の刊行が慶長四年に集中して行われたのかを考えたい。

慶長三年八月、後陽成天皇の庇護者であった豊臣秀吉が没し、天皇は同年十月、病を理由に譲位を望んだが、徳川家康の反対にあった。この時は天皇の病気が平癒したために事なきを得たが、家康の諫止は皇位継承決定権を約一二〇年ぶりに武家側に取り戻したものとしての意義は大きく、以後家康は天皇家に対して強硬な態度に出る。[30] 家康の開版事業として著名な伏見版『孔子家語』『三略』『六韜』の刊行も、慶長勅版とほぼ時を同じくする慶長四年五月に始まっていることは決して偶然ではあるまい。[31] 次代の天下人への階梯として、元来学問好きであった家康は伏見版の刊行を企図したと思われる。このことを知った後陽成天皇は、学芸は皇室・公家のものとしての対抗意識から、慶長勅版の刊行を急いだのではないだろうか。漢籍と国書とでは版式、刊行者[32]が異なるのは、両者の刊行が雁行して行われていたことを思わせる。なかでも『日本書紀神代巻』は、天皇家の存在意義を世に示すものとして、最も重視されたと考えられ

る。

おわりに

以上、慶長勅版のうち、慶長四年に刊行されたものを中心に、その刊行事情について些か私見を述べた。要約するに、慶長四年の刊行になる慶長勅版のうち、漢籍の五種については清原家の本文とは考え難く、国書の二種については清原国賢の関与が明確である。慶長四年の僅か四ヶ月の間に、七種もの勅版が相次いで刊行された背景には、当時学芸の面にまで目を向け始め、伏見版を刊行しつつあった徳川家康への対抗意識があると思われる。

最後に、今までほとんど触れることがなかった慶長二年刊『錦繡段』『勧学文』について簡単に述べておくことにする。この両書の版式は左右双辺・有界であり、慶長四年刊本の漢籍に等しい。『錦繡段』は天隠龍沢編の漢詩集であり、玄圃霊山の跋文を有し、その内容についての研究はまだ始まったばかりである。[33]『勧学文』は『魁本大字諸儒箋解古文真宝』前集の冒頭部分を抜粋したものであり、書誌についての詳細な報告がある。[34]

両書の刊記にはそれぞれ「此規模頃出朝鮮」「此法出朝鮮」とあることから、これらはキリシタン版の技法に拠りつつも、秀吉を憚り、事実を曲げて朝鮮の活字技法に仮託したと考えられてきた。[35]しかし最近、これを慶長勅版の刊行に従事した「朝鮮印刷工」への顕彰の為に、あえて刊記として記したものとする意見が出されている。[36]ちなみに、古活字版ではないが、京都大学附属図書館清家文庫に蔵する『大戴礼記』『孔叢子』『書史会要』は、その奥書に秀賢が朝鮮人に本文を書写させた旨が記されており、当時の朝鮮人の活動が垣間見られる。慶長勅版においても、朝鮮人の技術者を印刷工として従事させた可能性は大いにあると思われる。[37]本稿は慶長勅版の刊行事情のごく一端を明らかにしたにすぎず、古活字版の印刷技法については依然として不明な点が多い。今後は文禄・慶長の役で日本に連行された朝鮮人が、古活字版印刷にもたらした影響についても考えていくことが必要であろう。

注

(1) 川瀬一馬『増補古活字版之研究』講談社、昭42・12　一七七～一九二頁

(2) 金子和正「古活字本の印刷技法について　―慶長勅版を中心として―」(『ビブリア』六七　天理図書館、昭52・10) 森上修①「慶長勅版『長恨歌琵琶行』について(下)―わが古活字版と組立式組版技法の伝来―」(『ビブリア』九七、平3・10)、同②「古活字版印刷術の伝来　きりしたん版との出会い」(『日本古書通信』第七九三、七九四号　平7・8、9)

(3) 拙稿「慶長勅版『長恨歌琵琶行』『白氏五妃曲』の刊行について」(『汲古』三六号、平11・12)

(4) 注(1)川瀬氏前掲書一五二～一五四頁

(5) 注(2)森上氏前掲論文①七一～七二頁

(6) 森小彰「孝経の和刻」(水田紀久・頼惟勤編『日本漢学』中国文化叢書9　大修館書店、昭43・2)

(7) 東洋文庫本に拠るものが昭和十年に斯文会より、昭和十九年には佐々木竹苞楼の覆刻に、影印を補配したもの(現国会図書館蔵本)が伏見稲荷大社より刊行されている。ところで、慶長四年刊『古文孝経』序には「省」の文字が使われているが、この字は次に示すようにかなり不自然な文字である。これは小秋元段氏が慶長七年刊古

活字本において指摘したように（「五十川了庵の『太平記』刊行　―慶長七年刊古活字本を中心に―」（『文学・語学』第一六四号、平11・9）依拠した写本に影響を受けたものではないだろうか。なお、『孝経』の刊本については阿部隆一・大沼晴暉「江戸時代刊行成立孝経類簡明目録」（『斯道文庫論集』第一四輯、昭52・12）、大沼晴暉「孝経目録補遺並江戸時代孝経刊行年表」（『斯道文庫論集』第二一輯、昭60・3）があり、本稿はその多大な恩恵に与った。

肴

(8) 林秀一「孝経喪親章不読の慣行に就いて」（『孝経学論集』明治書院、昭51・11）

(9) 天理本を検討したものとして、木村三四吾・金子和正『勅版考　一古文孝経』（一）（二）（『ビブリア』二三、二五　天理図書館、昭37・10、昭38・6）があり、東洋文庫本については中野真麻里氏の執筆による「岩崎文庫貴重書書誌解題稿―古活字版の部（六）」（『東洋文庫書報』第三〇号、平11・3）三～四頁がある。

(10) 林秀一「わが国における孝経の伝来　―主として刊本時代について―」（『高野山大学国語国文』第三号、昭51・12）一六六頁

(11) 注(2)金子氏前掲論文七六頁。筆者も東洋文庫本を実見することにより、本書が木活字印刷であることを確認した。

(12) 注(8)(10)林氏前掲論文及び栗原圭介「孝経解題」（『孝経』新釈漢文大系35　明治書院、昭61・6）一〇頁

(13) 注(1)川瀬氏前掲書二〇四～二〇五頁に翻刻が、図録篇二五頁に写真が掲載されている。

(14) 高橋智「慶長刊論語集解の研究」（『斯道文庫論集』第三〇輯、平8・1）一三〇～一三一頁

(15) 森上修「初期古活字版の印行者について　―嵯峨の角倉（吉田）素庵をめぐって―」（『ビブリア』一〇〇　天理図書館、平5・10）一五七頁

(16) 注(14)高橋氏前掲論文一三〇～一三二、一六三～一六四頁

(17) 注(7)阿部・大沼氏前掲目録一六頁

(18) 高橋氏は古活字版『孟子』の本文を検討した上で、「清原博士が直接に古活字版の校訂に関与したという印象は強くはしないというのが実感である」と述べている。（「古活字版趙注孟子校記」（『斯道文庫論集』第二八輯、平5・3　一四九～一五一頁）清原家は明経道の家として、家学の公開にはあまり積極的ではなく、複数ある家本のうちから公開してよい本と、門外不出の本とを峻別していたのではないだろうか。後述の慶長勅版『日本書紀神代巻』『職原抄』については、それが家学と直接結びつくものではなかったために、本文を公開しているかとも思われる。

(19) 京大本については拙稿「清原家嫡流における庶流教隆の位置」（『和漢比較文学』第二〇号、平10・2）を参照されたい。

(20) 阿部隆一「古文孝経旧鈔本の研究（資料篇）」（『斯道文庫論集』第六輯、昭43・3）

(21) 『時慶卿記』は西本願寺に自筆本が存し、東京大学史料編纂所に写真帳がある。『夢後記』は時慶の訓戒書であり、大谷俊太氏により影印を付して紹介されている。（「夢後記　―西洞院時慶卿庭訓―」（『南山国文論集』第一三号、平1・3）

(22) 村山修一「近世初頭における都市貴族の生活」（『史林』第四三巻第四号、昭35・7）

(23) 木村三四吾・金子和正「勅版考　一古文孝経（二）」（『ビブリア』二五　昭38・6　四〇～四二頁。ただし匡郭・柱刻・界線を固定したまま活字のみ解版、組版を繰り返す点に関しては植字技術上困難ではないかとの指摘もある。（中根勝『日本印刷技術史』八木書店、平11・12　一四〇頁）

(24) 阿部隆一「本邦中世に於ける大学中庸の講誦伝流について―学庸の古鈔本並に邦人撰述注釈書より見たる―」（『斯道文庫論集』第一輯　昭37・3）一四、三三頁

(25) 注(1)川瀬氏前掲書一八三頁

(26) 白山芳太郎『職原鈔の基礎的研究』神道史学会、昭55・2　一七～一八頁

(27) 注(26)白山氏前掲書七二～七八頁

(28) 注(2)森上氏前掲論文①五三頁

(29) 井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町後期　改訂新版』明治書院、昭62・12　五九七～六〇一頁

(30) 今谷明『武家と天皇』岩波書店、平5・6　一三一～一三二頁、久保貴子『近世の朝廷運営　―朝幕関係の展開―』岩田書院、平10・5　三三～三六頁

(31) この三書ともに慶長四年五月の跋文を有するが、阿波国文庫蔵『六韜』の原表紙の裏張りには『孔子家語』がみられ、『孔子家語』が二書に先んじて刊行されたことがうかがえる。(川瀬氏「伏見版と駿河版」(『書物春秋』第一九号、昭7・6)一七頁及び注(1)川瀬氏前掲書二一〇頁)

(32) ここでいう刊行者とは、西洞院時慶、清原国賢等の刊行責任者とでもいうべき人物のことであり、実際の印刷工ではない。

(33) 堀川貴司「『錦繡段』小考」(『説林(愛知県立大学)』第四六号、平10・3)、同「『錦繡段』小考(続)」(『説林』第四七号、平11・3)なお、筆者は大東急記念文庫蔵本(二二―四三―六二)、東洋文庫蔵本(三―Ａｅ―2)を実見したが、両書共活字の訂正個所が完全に一致し、刊行直後の校正で訂正が行われたことを推定させる。

(34) 木村三四吾・金子和正・大内田貞郎「勅版考　二勧学文(一)」(『ビブリア』三三　天理図書館、昭41・6)

(35) 注(2)森上氏前掲①②論文

(36) 大内田貞郎「「古活字版」のルーツ、そして終焉(消滅)」(『ビブリア』一一三　天理図書館、平12・5)なお、慶長勅版『錦繡段』の跋文を記した玄圃霊三は西笑承兌等と共に秀吉の朝鮮侵略に協力している。(北島万次『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』校倉書房、平2・9)

(37) 当時の渡来朝鮮人の動向について検討を加えたものとして、丸茂武重「文禄、慶長の役に於ける朝鮮人抑留に関する資料」(『国史学』第六一号、昭28・7)、内藤雋輔『文禄・慶長役における被擄人の研究』東京大学出版会、昭51・3、鶴園裕・中野節子・片倉穣・笠井純一『日本近世初期における渡来朝鮮人の研究―加賀藩を中心に―

《研究成果報告書》』平3・3がある。

(やすの　ひろゆき)